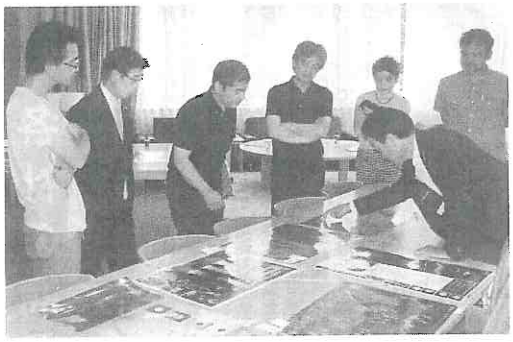
第7回 建築家のあかりコンペ2013 1次審査

総提出数63点から 7作品を選出

9月2日の2次審査で最優秀賞など決定

「第7回建築家のあかりコンペ2013」（主催・公益社団法人日本建築家協会／大光電機）の1次審査が18日、東京・神宮前の建築家クラブで行われた。



審査風景

山梨審査委員長

今回のテーマは〝闇を魅せるあかり〟。1次審査では、提出総数63点の中から、山梨知彦氏審査委員長（建築家）をはじめとする4人の審査員（内原智史氏／ライティングデザイナー、岡安泉氏／ライティングデザイナー、貝島桃代氏／建築家、前芝辰二氏／大光電機代表取締役社長）と特別審査員の芦原太郎氏／日本建築家協会会長が真剣な審査を行い、次の7作品を選出した。

『闇を切り取る扉』（岡本和樹さん）、『strings』（寺岡豊博さん）、『明暗境界線』（西毅徳さん）、『闇を求める』（岩田穣さん）、『300秒が作る宵闇』（荻原雅史さん）、『闇か光か光か闇か いずれにしても光は細く そして闇は暗く』（富崎一真さん）、『circle liner』（濱中直樹さん）。

9月7日の「JIA建築家大会2013北海道」で、2次公開審査を行い、最優秀賞1点（副賞30万円）、優秀賞1点（副賞20万円）、佳作賞3点（副賞5万円）、特別審査員賞1点（副賞10万円）、DAIKO賞1点（副賞10万円）を選出。その後表彰式が行われる。

審査員とスタッフ一同

芦原特別審査委員

内原審査委員

岡安審査委員

前芝審査委員

貝島審査委員

審査員講評

◇山梨審査委員長

どれも面白い。ドローイングからいろいろな可能性を感じるが、作品の説明を読む限り闇に迫っていなかったり、まだ、ストーリーが単純で、何かもう少し闇という言葉に引きずられるような、深みのある説明を2次審査で期待したい。

◇芦原特別審査委員

スイッチを入り切りするだけだった裸電球の時代から、LED等の技術が進化していると痛感した。

またどういう場所にどのように使い、生活を豊かにするかという提案が出てきた。陰と陽を生活の中でエンジョイする人が増えるとうれしい。建築家もそのために空間をつくっている。

◇内原審査委員

知らないうちに光りを見ている。テーマは闇なので、本当は半分半分くらいを占めているのに、いざ見るとなると人間の習性として、目がそちらに行く。

これは人間本来の習性に挑戦するようなもの。たぶん闇はきっと見ると言うよりも感じるという新しいエリア、新しい感覚世界をデザインしていくという意味では興味深いテーマであった。

◇岡安審査委員

闇を楽しむためには、ライフスタイルごと考え直すくらい、光以外を含めて全体でデザインをしていかないと次の未来は拓けないのではないか。

闇をきれいに見せるための光と闇があるとすれば、空間自体の有り様を、それに合わせていくことをやっていかないと次の世界は見えないのではないか。これが続くと、文化に切替わる時代がくるのではないかと思うので闇を意識するのは面白い。かつ難しいお題である。

◇前芝審査委員

メーカーの立場として、数年前から住宅における建築家照明というものを広げていきたいと考えている。ただ、施主様の理解不足もまだあり、雑誌やホームページ、展示会などあらゆる機会にアピールをしていくことが大事であると思う。この企画でも、できるならば商品化をしたい。特にビジネスとしてではなく、知らしめると言う意味がある。